

第 2 章

人々のアイデンティティを 形づくるもの



独立後はプハラ州にある聖者廟にたくさんの人が訪ねるようになった(2006年撮影)。

ソ連邦崩壊は、ウズベキスタンの人々の自己認識にも大きな影響を与えた。ウズベキスタン人の重層的なアイデンティティにおいて、それがもっとも顕著に表れたのは、宗教、コミュニティ、郷土に対する考え方の変化である。

I ウズベキスタンにおける宗教

民族と同様、ウズベキスタンにおいて宗教は非常に重要なアイデンティティの要因である。宗教をとりまく状況もまた、ソ連邦崩壊前後に大きく変わった。すでに述べたように、ソビエト政権が成立するまで中央アジアには現在の形の共和国もなければ民族意識もそれほど強くなかった。そのような状況の中、宗教は人々のアイデンティティに重要な位置を占めていた。多くの人は自分が住むコミュニティ、都市、もしくはより大きな単位として宗教をもとに自己認識をしていた。例えば、異国人と現地人が会ったとき、「あなたは誰？」という質問に一番適切な答えは「ムスリム」だった。

1 ソビエト政権とウズベキスタンのイスラーム

このようなアイデンティティの構造を変えたのはソビエト政権である。ソビエト政権は中央アジアをいくつかの共和国、自治共和国などに分けたが、それは人々を互いに民族別に認識させるためだった。そして、宗教を過去の遺物と見なしたソビエト政権はモスクや教会を最低限に減らし、宗教と国家、宗教と教育を分離した。その目的は、無宗教社会を作り上げることだった。この結果、人々の帰属意識を構成してきたもつとも重要なムスリム・アイデンティティが徐々に薄められ、人々は宗教心を民族文化の中に隠すようになった。もちろん、このような脱宗教化政策に対する反発はあったものの、世代が下るにつれて無神論教育が浸透し、人々の宗教心は弱まっていった。

そのような状況下で宗教的な教えを守り続けてきたのが隣人コミュニティとしてのマハツラである。実際、このマハツラ内で育った若者の間では宗教に対する愛着も比較的強かった。それは以下の言葉にも表れている。

「当時（筆者注…ソ連時代）の政策は反宗教的だったので、正式な宗教的行事はほとんど行われませんでした。しかし、私たちが住んでいたマハツラにはモスクがありました。そのモスクは今もあります。断食後のハイト（数日間のお祝いの期間）が始まると、私たちのマハツラの通りは人でいっぱいになりました。朝の四時から人々が集まりはじめ、お祈りをしていました。ハイト（の祝祭）は当時ある程度許されていました。特に年寄りにはハイトローザ（断食）を厳格に守っていました。私の祖母は断食もし、一日五回のお祈りもしました。私は小さいころからそのようなことを見てきました。私たちは大学で無神論（アテイズム）を勉強しましたが、家に戻れば祖母と父が私たちにコーランの読み方やお祈りの仕方を教えてくれました。また、例えば親戚が亡くなると、すべての儀式をイスラーム作法に従ってきちんといいました。」

キリスト教徒の間でも、両親が宗教を信じる家庭であれば、家庭内で子供に宗教教育が施された。そのような教育を担ったのは祖父母たちである。なぜなら、若い世代はソ連の無神論教育で育ったため、その上の世代でないと子供に教えられるほどの知識がなかったからだ。これは多くの証言で明らかになっている。

「私たちは宗教のことを深く考えたことがありませんでした。子供のころにオクチャブリータ、ピオネール、コムソモールなどを経験した人は無神論教育がすっかり染み込みます。そういう意味では私たちも特に宗教に愛着を感じていたわけではありません。親もあまり宗教的ではなかったけれど、祖父母は宗教に愛着を感じていました。そのこともあり、宗教を信じていなかった私たちも子供たちの洗礼やパスハ（復活大祭）などはちゃんと行おうと努力しました。一方で私たちは共産党を信じて行動していましたが、他方では子供としての宗教行事をちゃんで行っていました。当時の人々の宗教に関する姿勢も今とは異なっており、誰かが教会へ行くことがわかると、差別はしなかったものの区別はしていました。指をさして批判することはなかったのですが、教会・モスクに通う人に対する人々の態度はあまり良いものではありませんでした。今は宗教を信じる人もそうでない人も教会に行きますが、当時の人々はやはりある程度自分の信念に基づいて行動していて、無神論教育を受けていれば教会には行きませんでした。」

他方、宗教をあまり重視しなかった、もしくは共産党のイデオロギーを信じて宗教は信じなかった人は少なくなかった。当時の社会主義的なイデオロギーとして、信心深い人は

後ろ向きで保守的な人間だと考えられていたため、宗教にはネガティブなイメージがあったのだ。

また、人々には社会的な上昇志向と宗教への愛着が同時に存在し、それはソ連時代の宗教政策と矛盾していた。当時、キャリア構築に効果的かつ一般的だったのは共産党に入党することだった。しかし、入党とは日常生活が常に監視され自由が減ることを意味していた。実際の状況は、例えば以下のようなものだった。

「当時、共産党員になることは大変難しく名誉なことでした。私は一九七三年に大学を卒業してから一九七六年に党員になるまで面接の準備をしていました。党執行部の名前や党の憲章を覚え、大体一八から二〇問程度の質問に答えなければなりませんでした。私は医者という、社会的責任が重く一般的に尊敬されると思われる職業に就いていたため、共産党からの要求は厳しいものでした。入党できたときは一般国民と少し違うことを達成できた気がしました。まるで一般の人々よりも一段上になったような気分でした。さまざまな特別な行事に呼ばれはじめ、いろいろな特典を得ることができました。その代わり、モスクに行ったり、宗教関係の行事に参加することはできなくなりました。そ

のような場所へ行くと党から除名され、党員証を捨てなければなりませんでした。当時は、党から除名されるとそれまでの地位、周りからの尊敬や人間関係は一瞬にして消えてしまいます。党の行事に参加できないのは当然で、昇進の機会もまったくなくなりません。だからこそ、共産党員になつてから私はその身分を非常に貴重に思い、党から言われたことの多くに従いました。例えば、ある日、年寄りのグループがある地区のモスクへ行くという情報が郡の共産党に届きました。私はそのグループに誰が入っているか、そのグループがモスクに行けるように車の用意をしたのは誰かを調べるよう言われました。私はその地域の民警と一緒に現場へ行き、モスクの前で張り込みを始めました。年寄りがモスクに到着すると私たちはカメラで彼らを撮影し、写真をレポートとともに共産党の郡本部へ届けたのです。」

当時、多くの共産党員およびその候補者は宗教を信じることを批判する立場にいた。すでに述べたとおり、心から無宗教だった人もいた。しかし、家庭内では宗教行事をきちんと行い、そのことを共産党や他の機関に知られないようにしていた人もいた。彼らは、イデオロギーと宗教を自分たちの生活の中で共存させようと懸命だったのである。その中で、

もつとも厳しい立場に立たされていたのが共産党幹部だった。彼らは、自分の家で冠婚葬祭があると、宗教色のない形式をとるか、そもそもそのような儀式に参列しないか、いずれかを選ばざるを得なかった。例えば、父親が共産党幹部だった人によると、

「私の祖母が亡くなったとき、祖母を墓地に運ぶときは私たちの家ではなく親戚の家から出しました。共産党幹部である父がイスラームの教えに従ってそのような儀式を守っていることが知れたら、父は退職させられたからです。父も祖母の棺を運ぶ男性たちの後ろから歩いていましたけれど、手を（自分の前ではなく）後ろに組んで歩いていました。『オーミン』（注：両手で顔を覆う動作をし、祈りを捧げること）をしたと勘違いされないようにする必要があったのです。ハイトのときも父はわざと出張の予定を入れて家を離れるようにしていました。」

このように、共産党員は、たとえ自分の親や親戚の宗教行事であっても、可能な限り宗教的な部分を省くか、そもそも宗教的な儀式には参加しないという選択を迫られた。さらに、党員はウズベキスタン内だけでなく、海外出張の際も慎重な態度をとる必要があった。

特に、イスラーム諸国を訪問する際は、代表団の中に必ずといってよいほど一人か二人の監視員が同行した。監視員は、中央アジア出身者など、イスラーム教が強く根づいている地域の出身者に関して、海外でイスラーム教の行事に参加していないか、ソ連共産党の一員としてソ連の無宗教政策を海外でもきちんと強調しているかを見守っていた。ある証言者の父親はまさにそのような状況におかれた。

「父がイラクに出張したとき、ソ連の代表団の大半はウズベク人で、イラク側もイスラーム教徒でした。代表団の訪問先の多くはイスラーム教徒にとって重要な場所で、一緒に行ったイラク人はそれらの場所でお祈りをしたり『オーミン』をしたりしましたが、代表団のウズベク人は（筆者注…自分が祈っていないことを監視員にアピールするため）手を下げてまっすぐ立っていました。しかし、イラク人のお祈りが終わったときに代表団の一人がついに『オーミン』をしてしまい、手を顔に当ててイスラーム教徒がよくするようなジェスチャーをしてしまいました。その人はまだイラクにいる間に共産党から除名され、辞職させられました。」

2 独立後のイスラーム

状況が変わったのはペレストロイカ以降である。特に独立後は、数多くのモスクが新たに建設され、モスクでの礼拝の自由も認められるようになった。ちなみに、カリモフ大統領も宣誓式ではウズベキスタン憲法と同時にコーランに手を当てる誓いをした。ウズベキスタンにおけるイスラームの形そのものがソ連時代とソ連邦崩壊後とで大きく変わったわけではないが、ソ連時代と大きく変わったのは、人々が宗教を信じることを隠さなくてもよくなったことである。ソ連時代、人々はイスラーム教徒であることを認めることすら恐れていた。しかし、独立後、彼らはイスラーム教徒であることを堂々と誇れるようになった。多くの人はイスラーム教徒の義務とされるメッカ巡礼の旅をするようになり、何度も訪れた人もいる。

しかし、ソ連時代の影響に加えてさまざまな要因が重なり、イスラーム教徒が住民の大半を占める中央アジアにおけるイスラームのあり方と、中東地域のイスラームのあり方は異なっている。ウズベキスタンでは、宗教は個人的な問題であり集団として選択するもの

ではないと考える世俗主義が深く根づいている。また、ウズベキスタン国内でも宗教に対する姿勢の違いがあり、農村部は宗教をより重視しているが、都市部の生活は概して世俗主義のままである。例えば、フェルガナ盆地では歴史的に敬虔なムスリムが非常に多いが、タシケントや他の都市部では、生活の近代化が進み、民族構成も多様であるため、宗教への愛着は薄れている。

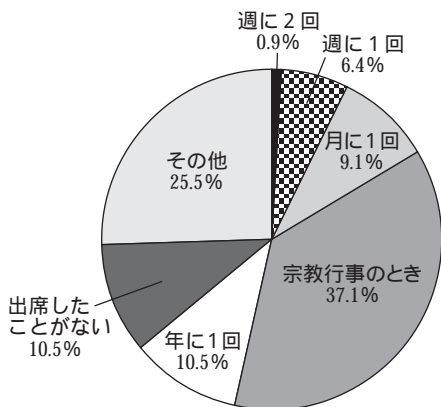
例えば、ウズベキスタンを対象にしたアジアバロメーター調査のデータ（二〇一三年）（図1）からもわかるように、週に何度かモスクに通う人もいれ



独立後にイスラーム関連の建築の修復が進められた（ブハラ州、2006年撮影）。

ば通わない人もいる。三分の一強が主に結婚式、葬儀といった家族の行事があるときに宗教施設へ行く。このように、現代のウズベキスタン社会には宗教に愛着が深い人々がいる一方、ソ連時代の影響を受け、いまだに宗教を完全には受け入れられない人も少なくない。イスラーム教は信じるものの、一日五回のお祈りをあまりせず、宗教行事も最低限しか守らない人も多い。また、宗教への愛着度は年齢が上がるほど高まる傾向にあり、若者の間では宗教に対する

図1 礼拝への出席



(注) サンプル800人、対面インタビュー方式。
 (出所) ウズベキスタンにおけるアジアバロメーター調査(2003年)

愛着がそれほど顕著ではない。筆者は、四十代のある男性に彼の宗教に対する考え方の変化について聞いてみた。彼によれば、

「年をとるほど、自分の人生が終わりに近づくことを考えはじめた。自分の人生の先に何かあるのかを考えたとき、やはり宗教がその答えを出してくれるから、自分もどんどん宗教的になっていく」と言う。

ウズベキスタンの人々にとつて、宗教への愛着は日常生活で何かを制限するということで表せることではない。例えば、本来イスラームで禁じられているお酒を飲む人は多く、少ないものの豚肉を食べる人もいる。お酒を飲むムスリムにその理由を聞くと、よくある答えは、「限られた量であれば、お酒は体に不可欠だ」とか「ビールはお酒じゃない」とか「ビールの材料は麦だから、ビールを飲むことはパンを食べているようなものだ」というものである。最近は豚肉を出す店も現れた。筆者がサマルカンドを訪ねたとき、「もし今日おいしいものを食べたければ、良い店があるよ」と言われ、よく聞くと豚肉を出す店だった。断食についても強制されることはなく、人々は断食するかどうかを個人的な観点から判断して決める。しかし、周りに影響される人も多く、一人で目立つのは嫌なので断食したり、宗教的な教えを守ったりする人も少なくない。その論理は以下の証言にも表れている。

「断食したい人はそうしてもよいと思う。ソ連時代は年寄りがよく断食をしていたが、私たちは若かったからしなかった。今では時期によって私も断食するけれど、それにはいくつかの理由がある。第一に、私たちはムスリムであり、断食はムスリムの義務である。第二に、やはり断食の時期に断食をしないと目立つ。どこに行っても断食している人がいるのに自分だけ断食しないのはやはりいけないことかなと思ってしまふ。他人と自分を比べると自分の(宗教に対する)不真面目な姿勢が恥ずかしいので断食をちゃんと守るようにしています。」

3 イスラーム原理主義とその原因

社会生活におけるイスラームの復活にはいくつかの段階があり、独立前後はイスラームをあくまでもウズベキスタンの伝統の一部と見なす人が多かった。政府も伝統的な価値観を復活させることにそれほど反対せず、むしろ推奨していた。そのため、ウズベキスタンでは海外の資金を受けて各地で新しいモスクが建てられ、人々の宗教に対する愛着も強まった。しかし、独立以前から、政府はイスラーム復興を目的とした海外からの資金の流れ

に悩まされはじめた。政府の懸念は独立直前にナマンガン事件という形で現実のものとなった。

ナマンガン事件は、一九九一年、フェルガナ盆地のナマンガン市で多くのムスリムがイスラーム復興の影響を受け、イスラーム国家建設を政府や大統領に求めた事件である。彼らは市内では独自の法を適用し、「自治区」の中に「犯罪防止委員会」を設置した。カリモフ大統領や政府にとつて、これはイスラーム原理主義者からの挑戦に見えた。政府は彼らの指導者を次々と連行した。何人かの指導者はタジキスタンや（タジキスタン内戦後は）アフガニスタンに逃亡し、イスラーム原理主義テロ組織であるウズベキスタン・イスラーム運動（IMU）を結成してウズベキスタンにおけるイスラーム国家形成を追求しつづけている。

この運動がナマンガン市で始まったことや、運動がフェルガナ盆地を中心とする現地の人々に支持されたことについてはいくつかの理由が考えられる。まず、フェルガナ盆地はウズベキスタンでもっとも人口が多い地方であると同時に多くの社会・経済的問題を抱えている。そのような状況のもと、フェルガナ盆地やナマンガン市の人々は自分たちの利益が政府に守られていないと認識していたため、宗教をとおしてさまざまな問題解決を求め

はじめた。海外のさまざまな宗教グループが貧困などに苦しむ人々に受け入れられやすくなり、過激な考え方が広がる要因となった。人々は、政府が自分たちの問題を解決できないのならば、平等で公平な宗教国家はそのような問題に対応するうえで選択肢の一つだと考えるようになった。政府もそのような考えをもつ人たちに対話というより強硬な政策をとった結果、原理主義の拡大を招いてしまったのである。

政府にとって最大の脅威は一九九九年二月十六日にその姿を現した。この日、タシケントの複数の場所で同時爆発が起こった。このテロ行為は二・一六テロ事件と名づけられ、さまざまな波紋や解釈を生んだ。政府は、二・一六事件はカリモフ大統領の暗殺を企てたものであり、イスラーム原理主義者を含むテロ組織によるテロ行為だと厳しく非難した。また、一九九九年から二〇〇一年にかけて、IMUの武装集団はタリバン政権下にあったアフガニスタンからウズベキスタン、キルギス、タジキスタンにまたがるフェルガナ盆地へ侵入した。さらに、ウズベキスタンで二〇〇四年四月に起きたタシケント・プハラ爆破事件と同年八月にタシケントで起きた（検察庁、米国大使館、イスラエル大使館を狙った）自爆事件にもイスラーム色のあるテロ組織がかかわったとされている。

現在に至るイスラーム原理主義とウズベキスタンにおけるテロ事件の発生には、確かに

ウズベキスタン政府の対宗教政策の失敗という側面が存在する。しかし、根本的な理由は、やはり社会制度の劇的な変化に伴う生活水準の低下、貧困、将来への不安、安全確保の不足である。これらは国家への不信を生み、原理主義が影響力を拡大する背景となった。

Ⅱ ウズベキスタンのマハツラ

マハツラと呼ばれるコミュニティは、ウズベキスタンの人々のアイデンティティ形成において重要な役割を果たす人的ネットワークの代表例である。

マハツラとは、アラビア語で都市の住宅地域に見られた街区あるいはいくつかの街区を合わせた行政単位を意味する。これは、いわゆるイスラーム世界の伝統的な都市に広く見られる。八世紀以降、徐々にイスラーム化の進んだ中央アジアでも、この語は都市の街区や農村地域の地区などの意味で用いられてきた。マハツラは、都市社会のもっとも基本的な単位であり、都市の住戸はいずれかのマハツラに所属しているのが普通であった。

中央アジア南部のオアシス地域では、個々の住宅は高い粘土壁で囲まれたスペースに中

庭を設け、その周りに住居空間を配置するのが一般的であり、これらの住宅を細い路地で結びながら、生活と行政の両面で近隣コミュニティとして機能してきたのがマハツラである。その主な機能は、相互扶助的な隣人ネットワークであり、住民は一つのモスクやパン焼釜を共有しながら、冠婚葬祭などの儀礼を共同で実施し、また必要に応じて労力を提供し合い（ハシャル）、用水路や貯水池の建設や維持、モスクのような共有の建物の維持、修復や道路の清掃に当たってきた。非金銭的な相互支援の仕組みであったとも言える。住民の安全や治安の維持も、マハツラの重要な役割の一つであった。このようなマハツラに寄せる人々の帰属意識は濃密であり、プハラ人やサマルカンド人という個々のオアシス都市への帰属意識と並んで重要なアイデンティティのよりどころであったと考えられている。

また、マハツラは政治権力が都市住民を統治するときの基本的な行政単位でもあった。マハツラの長、アクサカル（直訳すると、「白い髭」）は、住民からの推挙を受けたのち、都市の支配者の認証を受けて職務に就き、税の徴収や命令の伝達、治安の維持、住民間の紛争の調停、孤児や寡婦の後見などに責任を負うのが慣行であった。政治権力は頻繁に交代したが、中央アジアのオアシス都市社会の持続性を支えてきたのは、このマハツラだったと言える。

1 マハツラの伝統的な機能

歴史的に、マハツラは若者の教育、住民間の交流および相互扶助などを果たしてきた。マハツラにおいては、コミュニティの中心的な人物、いわばまとめ役としての長老（アクサカル）の役割はきわめて重要である。

筆者が育ったマハツラでも、長老による「教育活動」があった。長老は、万引きをする、タバコを吸う、家出をする、親の言うことを無視するなど、行動に問題のある子供を厳しくしつけ、二度とそのようなことをしないように見守った。個人的に叱って効果がなければ、子供をマハツラ総会（住民と彼らを選出する長老で構成される）でみなの前に立たせた。そうすると、多くの子供は、マハツラ住民の前で恥をかきたくないからか、言われたことを理解したからか、非行が直っていった。それでも改心しない子供はマハツラから見放され、警察の少年課の世話になるのだった。

マハツラでは、ギャブ（近所付き合い）も盛んに行われている。これは月に一〜二回、近所の住民の家に集まり、ごちそうになりながら世間話をするのだが、情報交換をすること

で、近所同士の関係がより親しくなる。また、ハシャルと呼ばれる（特に家の建てかえの際の）助け合いも重要である。人々は、レンガをきれいに並べたり、二、三人で壁を一枚作ったりして、それぞれができる範囲で手伝う。ハシャルは現在も存在するが、最近では労働で貢献したくない人たちが職人をマハツラの外から雇って自分の代わりに働かせることもある。その方が支援の内容としては効果的だと言えるし、自分の役割を果たしたこともなる。

近所で行われる冠婚葬祭にも同じ論理がはたらく。ウズベキスタンの結婚式は規模が非常に大きく、二五 人から三 人を招待するのが一般的だ。一つの家族ですべてに対応するのは非常に難しいため、どうしても近所の人々に頼らなければならない。葬式での助け合いも欠かせない。イスラームの教えに従えば、朝方に亡くなった人は昼までに、昼すぎに亡くなった場合は日が暮れるまでに埋葬する必要があるため、短時間で多くの作業が必要となる。また、葬儀では故人の棺を墓地まで担いで運ぶが、それに加わる人の数で、故人の人となりや人生に対する周りの評価がわかる。つまり、多くの人が見送りに来るほど、その人は善い人生を送り、尊敬されていたのだと受けとめられる。

なお、マハツラでの生活や道徳的規範の維持において、拡大家族が果たす役割はきわめ

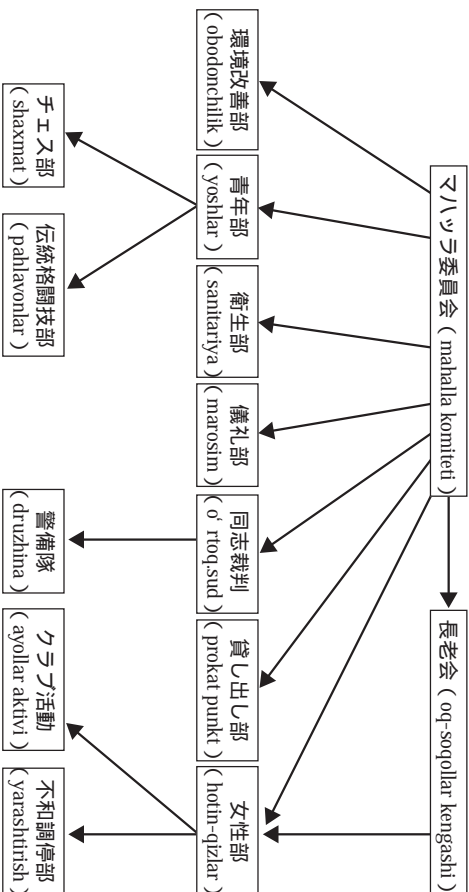
て重要である。その一例は、お年寄りによる若い世代のしつけである。なかでも、祖父母の役割は大きく、孫が学校以外の時間を彼らとともに過ごすことは多い。お年寄りに対する尊敬や彼らの価値観をしっかりと教えられて育った子供たちは、自分の家庭や自分が生まれ育った地域に対する愛着が非常に強い傾向がある。彼らはマハツラの活動にもよく参加し、次第にマハツラのような近所のつながりを重要な社会的ネットワークと見なすようになる。マハツラが彼らにとって拡大家族の一部と見なされることもある。

2 人々から見たソ連時代のマハツラ

マハツラの姿が大きく変わったのはソ連時代のことである。マハツラがかつてもっていた社会的な役割は限定され、マハツラはもっぱらソビエト政権の目的に従う社会組織となつた。

ソ連時代のマハツラに対する政策は、マハツラをソビエト的な考え方の宣伝に利用するか、マハツラに「二次的な役割」(同志による裁判、マハツラ内の青年部による若者の教育、無料労働日の街路掃除など)を与えることだった。

図2 1970年代におけるマハッラ委員会の構造の例



(出所) オクチャブウ40イッリギ・マハッラ委員会の事例。

一見すると、マハツラが古くからもつていた存在意義と仕組みは、ソビエト政権に破壊されたかのようである。実際、マハツラは封建的な遺制にしばられた古い社会組織、あるいは否定、除去されるべきイスラーム的な伝統の温床として批判されることもあった。しかし、こうした批判にもかかわらず、マハツラのモラルや教育的役割、イスラーム的な慣行、近隣コミュニティに基づいた人的ネットワークは、住民の努力によって非公式の形で保持されていた。

多くの人はマハツラに参加する程度を自分たちで決めていた。ソ連時代にはマハツラと関係をもたなかった人もいれば、マハツラに住み自然に関係をもっていた人、そしてマハツラの活動に積極的に参加した人がいた。参加の程度を左右した要因としては、民族的帰属意識（マハツラを自分たちの伝統の一部と考えるウズベク人の方が、ロシア人よりもマハツラに積極的に参加した）、社会的立場、マハツラに対する考え方、居住地域（都市か農村か、都市であれば新市街か旧市街か）などを挙げることができる。マハツラに関心をもたない人に話を聞くと、たいていは次のような答えが返ってくる。

「私はソ連時代のマハツラについてあまりよく覚えていません。私にはマハツラに住

んだ実感がありません。私が住んでいた地域にマハツラはあつたけれど私が知らない可能性もあります。現在、マハツラは政府から評価されはじめ、より多くの権限を得ていますが、私は今でもマハツラにそれほど関心はありません。」

マハツラに関する知識はあつても、その援助をそれほど必要としなかつた人も少なくな。彼らは、アドバイスをもらうことでコミュニティから精神的な支えを得たが、それ以外の部分ではあまりマハツラに頼らなかつたという人たちである。次のような意見はそのような人々の見方を象徴している。

「ソ連時代にもマハツラがありました。マハツラ委員会があり、それぞれのマハツラ委員会に委員長がいました。確かに、当時のマハツラには経済力がなく、経済的支援を期待する人もそれほど多くありませんでした。多くの場合、マハツラはさまざまな行事のやり方を教える、人々の精神的支えでした。結婚式を開きたい場合どのようにすればいいのか、他の住民に迷惑をかけないようにするにはどう気をつければいいのか、身近な人間が亡くなつたらどのようにして葬儀を行えばいいのか、などに関してアドバイス

をもらいました。」

他方、マハツラに住んでその人々と交流をもたざるを得ない人は、その社会的ルールを守り、コミュニティの一員として生活をしていた。そのようなマハツラの多くはウズベク人が構成していた。「二人のウズベク人が出会つとすぐにマハツラを作ろうとする」ということわざまである。しかし、ウズベク人以外の民族もマハツラに積極的に参加していた。彼らはマハツラについての理解を深める努力をし、長い時間をかけてコミュニティに受け入れられるようになっていった。あるロシア人女性は次のように回想している。

「私はロシア人で、マハツラの存在そのものをあまりよく理解していませんでした。私の夫がウズベク人だったため、私たちはマハツラに住みつきました。最初のころは私もたくさんの失敗をしました。例えば、洗濯後の汚れた水を水路に流しました。次の日に近所の人に来て、『昨日、洗濯しました?』と聞くので、したと答えると、『汚れた水をどうしました?』と聞かれ、水路に流したことを伝えると、彼女は『マハツラには水路の水を家事に使う人が多いから、汚れた水を水路に流す人はいないよ』と教えてくれ

ました。彼女に教わって裏庭に汚れた水を捨てる穴を掘り、その日から私もちゃんとしてルールを守るようになりました。私に注意してくれた人は怒ることもなく優しく説明してくれました。

さらに、私が出産のため入院していたとき、マハツラの人たちが私の親戚がロシアからお見舞いに来ることができないことを知って、毎日のように順番に病院まで料理を持って来てくれました。とても温かい気持ちになり、ありがたかったです。

年上の人の年下に対する姿勢は厳しかったけれど、やさしさもありました。例えば、ある日、私の娘がマハツラのほかの子供と遊んでいると、一人の長老が彼女を呼んで、『あなたに両親はいるか？いるなら、なぜあなたにロジム（女性がスカートの下にはく膝までの半ズボン）を作ってくれないんだ？』と聞いたそうです。私はロシア式にスカートだけで子供を遊ばせていたけれど、こちらではその下に（脚やパンツなどが見えないよう）半ズボンのようなものを着させる習慣のあることをそのときに知りました。

私たちのマハツラは人間関係が非常に良く、私はいまでも当時の近所の人とお会いすればいつも挨拶したり長話したりしています。」

この女性の証言から読みとることができるのは、コミュニティの人々が外部者を迎え入れる過程、およびその中で社会的コンセンサスの重要性である。

3 独立後のマハツラの姿

独立とともに、マハツラは本来の姿で人々の日常生活の中に復活を遂げた。独立後の政策によって、マハツラはさまざまな権限を与えられ、非公式かつ伝統的な組織から公式な準行政機関へと変貌した。その目的は、国家機関の限られた財源と昔からあるマハツラの仕組みを組み合わせ、より民主的で透明な統治制度を作り上げることにあつた。しかし、マハツラの公式化は、事実上、新たな行政機関を作り上げることになってしまい、マハツラに対する住民の信頼と期待は裏切られる形になった。あるマハツラ住民の以下のような意見はそれを如実に示している。

「ソ連時代にもマハツラはありましたが、今ほど行政から注目を浴びてはいませんでした。当時のマハツラの構造としてマハツラ長がいたけれど、彼には事務所もなければ

予算もありませんでした。彼の主な役割は、住民同士でケンカ、対立や盗難などがあつた場合に介入して、自分の家に対立し合う人たちを和解に導くことでした。そういう意味では、今の方がマハツラに対する注目度は高いです。

しかし今では、マハツラに注目と財源（筆者注：事務所費、職員の給料など）が集まる一方、マハツラ内の人々の関係は変わってしまいました。まず、昔（筆者注：公式化される以前）のマハツラではお互いに対する思いやりがあり、個々人の問題は住民全体の問題として考えていました。当時の（筆者注：現在ののような犯罪防止隊が存在しなかった）マハツラの方が泥棒も少なく、みんな家のドアを閉めずにドアに鍵をかけずに暮らしていて、住民同士の信頼度は高かったです。

今のようなマハツラをとおした公式な支援支給制度がない中でも、お互いに助けあつてきました。私たちも昔からマハツラに住んでおり、私は祖父の家に住んでいました。隣には三人の子供をもつお母さんが住んでいて、彼女の夫は戦争に行つたままでした。祖父は私たちが困つていたにもかかわらず、できるときには少しでも隣の人にパンなどを分け与えていました。

今のマハツラの状態を見ると、生活が良くなつて（筆者注：さまざまな支援の仕組

みが制度化されていられるにもかかわらず、人々のお互いに対する優しさはどんどん減っています。子供たちは年長の人に対する尊敬というものを知らず、マハツラ内に住んでいるお金持ちも恵まれない人に対する配慮をしません。今のマハツラには人間らしさが残っていません。それはマハツラに限らず一般的に人々の人間関係が悪化している証拠です。私はそのような社会の変化に反対しており、子供たちに対する教育が足りていないと思います。」

このように、人々の多くはマハツラに愛着をもっており、コミュニティ内でさまざまな手助けをしていた。ソ連時代マハツラは国家機関から利用もしくは否定されていたため、そのような愛着を表に出すことはできなかった。独立後に国家がマハツラの重要性を全面的に認めたことは人々に歓迎されているものの、その一方で、国家機関のマハツラ運営・委員会の選出などへの介入について慎重な意見を述べる人は多い。そういう意味では、人々の多くは公式化されて行政機関の機能を果たしているマハツラの姿にそれほど親近感を抱いていない。むしろ、昔の非公式なコミュニティ内にあった人々の関係が壊れていくことを気にしているように思われる。

Ⅲ 郷土意識

ウズベキスタンでは、宗教やコミュニティが人々のアイデンティティのすべてを表しているとは言えない。ウズベキスタンの人々にとつて、アイデンティティを構成する第三の要素は郷土意識、つまり、自分の居住地や出身地に基づくアイデンティティである。人々は、自分が育った地域を中心に人的ネットワークを構築し、その地域を離れても互いに連絡を取り合い、遠く離れた滞在先・居住地でも同郷の人々と強いつながりを維持する。ウズベキスタンの場合、そのようなアイデンティティは、出身都市に基づいたものが一般的であり、主に、タシケント人（首都タシケントと自分とを結びつける人々）、フェルガナ人（ウズベキスタンの主要な都市、フェルガナ、アンディジャン、ナマンガンを含むフェルガナ盆地と自分とを結びつける人々）、サマルカンド人・ブハラ人（サマルカンドもしくはブハラと自分とを結びつける人々で、両者が一集団を構成）である。このような自己認識が人々の間に広がった理由はいくつもあるが、なかでも中央アジア地域では個々のオアシスが行政単位として重要な役割を果たしてきたという歴史的背景も挙げられる。ウズベキスタンでソビエト社

会主義が形成された段階でも、出身都市を重要な自己認識の単位と見なす人が多かったため、ソビエト政権はそのような現象への対応に頭を悩ませた。

1 ソビエト政権とウズベキスタンの地域主義

長く続いたソビエト政権も、中央アジア社会の地域主義に基づく人的ネットワークや地域主義構造を完全になくすことはできなかった。むしろ、ウズベキスタンの地方エリートは自分たちの地位を固め、ソ連共産党やソ連中央政府のコントロールを弱めるに至った。ソ連政府・共産党もそのようなネットワークをなくすことを長期的な課題と設定しつつも、政策を実行するうえで彼らを利用しようとしていた。ソビエト政権と地方エリートとの関係を如実に表すのは人事政策である。ソ連時代の中央アジア各共和国において共産党は地域主義を批判したが、その共産党自身が地方権力者間の対立の場になっていた。ソ連の人事制度ではアジア系(かつムスリム)の連邦レベル政府・党幹部への登用率が非常に低く、中央アジアの共産党員は、せいぜい出身地域が共和国内で幹部になることしか望めなかった。しかし、いったん中央アジア系の政府・党幹部が連邦レベルの国家運営に参加を

認められると、彼らは出身共和国・出身地域の利益を優先的に扱った。地方権力者たちはソ連中央政府に忠誠を誓いつつ、出身地域の政治的立場の強化に努めていたのである。

ソ連中央政府とソ連共産党もこの仕組みを利用して中央政府のコントロールを固めていた。例えば、共産党のある地方幹部がソ連中央政府の信頼を裏切るようなことがあれば、彼らと対立する地域出身者を幹部に多く採用した。ソ連中央政府は地域間対立で仲裁者の役割を演じることによって、地方権力者たちの動きを監視していたのである。各地域出身のリーダーが各共和国の共産党第一書記に就任することは単に個人の交代を意味するわけではない。それはリーダーと同じ地域出身のエリートの立場を有利にすることであり、最終的にはその地域の経済・社会的利益につながった。

ソ連中央政府とソ連共産党にとってパトロンのになった利点は大きいと言われる。パトロンになることでソ連中央政府とソ連共産党は少なくとも三つの利益を得ることができた。第一に挙げられるのは「使い捨て」政策である。これは、ある時期に特定のリーダーを支持し、その必要性がなくなったり、パトロンにとって「子分」であるリーダーが自発的な行動をとったりするとすぐに交代させるというものである。第二に、中央政府の経済力強化につながる地域出身者を支持することでソ連中央政府とソ連共産党は経済力強化を果た

すことができた。そして第三に、ソ連共産党書記長は各共和国のリーダーを個人的に選ぶというプロセスをとおして、その個人的関係を自分の権力強化につなげていた。

一九八九年、ウズベキスタン共産党第一書記であったニシャノフがソ連最高会議民族会議議長に任命される。そしてニシャノフ（フェルガナ出身）の推薦もあり、後任として現大統領のイスラーム・カリモフ（サマルカンド出身）がウズベキスタン共産党第一書記に就任した。一九八九年にカリモフ第一書記を誕生させた要因のひとつは、彼がサマルカンド出身であるにもかかわらず、サマルカンドをはじめいかなる地域の指導的人物でもなかったことだと解釈する説もある。

一九八九年の段階で、ソ連共産党幹部はウズベキスタン共産党内の地域間競争に歯止めをかけるつもりでカリモフを第一書記に任命した。その目的は、地域的な利害に関係をもたない人物を妥協の産物として任命することだった。しかし、ソ連邦崩壊までのカリモフ第一書記の任期中（三年）と独立後の時期には、大統領が政権強化のためにサマルカンド出身者を重要なポストに任用するケースが増えるとともに、サマルカンド出身者の影響力は経済界でも非常に強まった。その後の政治を見ると、カリモフ大統領はサマルカンド出身の幹部をある程度優先的に扱うものの、彼の人事政策においては個人的な

信頼や他の要因も重要になってきた。現段階では権力が大統領に集中しているため、さまざまな地域のリーダーの出番はない。しかし、将来的に、カリモフ政権以降において、人事に関しては、さまざまな地域出身者間の権力闘争が起こるといふ新展開も考えられる。

ウズベキスタンにおける郷土意識は、社会生活だけでなく政治的エリート登用の過程でも役割を果たしていると指摘する研究者が少なくない。これは、ウズベキスタンの政治構造に関する研究においてしばしば指摘されている。ウズベキスタンの場合、地域主義は、ソ連時代の全期間を通じて、権力に近づく重要なルートの一つと見なされていた。政治という舞台の主な役者は、タシケント、フェルガナ、サマルカンド、ブハラ出身のエリートたちだった。地域主義によるエリート登用が公然と行われていたわけではないが、エリートの政治的・職業的キャリアを決めるうえで重要な要因になったとされている。

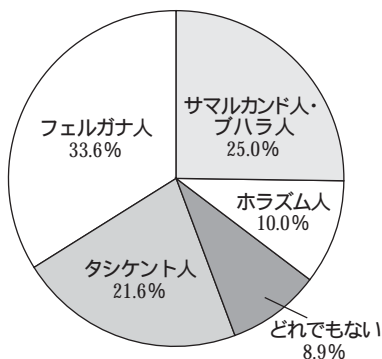
2 独立後の地域主義

ソ連時代に人事政策などでよく見られた地域主義は、ソ連邦崩壊後、人々の関係においてその姿をはつきりと現しはじめた。ソ連時代、地域主義の論理は人事や権力闘争で利用

される一方、ソ連中央政府はそれが一般人の間へ広がることを防ぐためにイデオロギーなどで歯止めをかけてきた。しかし、ソ連邦崩壊に伴ってイデオロギーが姿を消し、経済状況が悪化した。すると、一般の人々も、生活維持や利益追求のために、出身地域に基づいたネットワークを利用するようになった。人々は同じ地域出身者同士で助け合おうとした。

二 三年に行われたアジアバロメーター調査では、タシケント人、フェルガナ人、サマルカンド人・ブハラ人、ホラズム人といったアイデンティティを共有する人が多いことが明らかになって

図3 郷土意識に基づくアイデンティティ



(出所) ウズベキスタンにおけるアジアバロメーター調査(2003年)。

いる(図3)。

人々の日常生活に表れる郷土意識は、例えば以下のようなものである。地方出身の人々は、タシケント生まれの人々に対して、彼らが個人主義的であるというステレオタイプなイメージをもっている。また、首都であるタシケントにはさまざまな人が移り住むが、タシケントで生まれ育った人々の中には、地方出身者に抵抗を感じるケースも少なくない。タシケント出身者の特徴としては、自己主張の強さ、個人主義、そしてその結果としての一体感の欠如が挙げられる。彼らはタシケント出身者であることに誇りをもっているが、連帯意識はそれほど強くない。

ウズベク語を話す人が大半を占めるタシケント、フェルガナ地方、タジク語を話す人が多いサマルカンド、ブハラ地方の出身者や住民の間には、出身地域の違いに基づく分裂が存在する。このような現象は、同じ地域内にある都市の間にも存在する。例えば、フェルガナ、アンディジャン、ナマンガンは、すべてフェルガナ盆地に位置するが、これらの都市の出身者の間には、互いに対する一定のイメージや偏見が存在すると言われている。このような態度は、人々が各都市の文化やメンタリティに違いを感じることから生じるものと考えられている。サマルカンドとブハラ出身者にも同じことが言える。

ただし、郷土意識に基づくアイデンティティとウズベキスタン人というアイデンティティとは必ずしも矛盾するわけではない。例えば、海外にいるウズベキスタン人の間にはある程度の一体感がある。互いに接するときの姿勢は、どの地域の出身かではなく、同じ国の出身だという前提に基づいている。多くの場合、人々はウズベキスタン人というアイデンティティを国外で使い、国内では民族や地域のアイデンティティを強調する。

以上のようなアイデンティティ区分は、機能的な意味をもつ。人々は、まず互いの出身地域を尋ね、それによってしばしば態度を変える。このような心理に根ざした行動は、例えば大学生の交際にも見てとることができる。多くの場合、学生たちは違う地域から来た学生よりも同じ地域出身の学生と、容易かつ積極的に友達になる。例えばタシケント出身の学生の考え方、服装や言語は地方出身者と違って、平たく言えば「格好つけたがる人たち」と地方出身者からは見られている。彼らは都市で快適な生活をしていて、地方出身者のことを馬鹿にすると非難される。実際、大学在学中、筆者は地方から来た学生たちの行動パターンに以下のような特徴があると感じていた。学生はタシケント出身者と地方出身者に大体分かれていた。学生が構内で話をしたり学生食堂で食事をしたりするとき、タシケント出身の学生同士、地方出身の学生同士で行動するのは見慣れた光景だった。も

ちろん、彼らの間にはつきりした線引きがあったわけではなく、出身地にかかわらず仲良く付き合いをすることも少なからずあったが、同じ地域の出身者との付き合いは大学卒業後も続くことが多かった。特に、地方出身者がタシケントで就職した場合、故郷から離れて一人で生活していくのは容易ではない。大学時代の友情は、都市部での生活に安定感、安心感を与えてくれるので、アイデンティティの混乱・喪失に悩まされないのかもしれない。実際、同級生に聞くと、やはり同じ地域の出身か、それに近い人と行動する方が、安心できるし言語や服装などを理由に笑われる心配もないという。このように、出身地に関する認識はその姿がさまざまな形で表れ、ウズベキスタンにおいて一定の役割を果たしている。

独立後のウズベキスタンでは、(ソ連時代と比べれば数は増えたものの)限られた数の政党しか存在せず、入党資格も(以前の共産党よりは緩くなったものの)制限的である。このことから、政治システムの頂点および中間層の多くの政治家が、自分の立場を強化するために利用するチャンネルとして、地域主義に基づく非公式な結びつきやネットワークの形成を促進したのである。ウズベキスタン社会における郷土意識の問題は、次章で検討するウズベキスタンの政治構造や政治のあり方とも密接な関連性をもっている。